

北方史研究の成果を活用した高等学校日本史の単元開発 —13～16世紀の和人・アイヌ民族の関係史を題材として—

Creating a lesson plan for High school students focusing on history of the northern area of Japan island in 13th ~ 16th century

金子 勇太*・小瑤 史朗**

Yuta KANEKO*・Fumiaki KODAMA**

要 旨

近年、北方史研究の進展により、東北・北海道地域の歴史に対する新たな見方が様々に提示されている。しかし、これらの研究成果は学校・歴史教育には十分に反映されておらず、特に高等学校の日本史教育では、依然として政権所在地を基軸とした一国史的な見方・考え方が内容編成の基調となっている。こうした現状を受け、本稿では、13～16世紀の北東北・北海道地域における和人集団とアイヌ民族の関係史に焦点をあてながら、北方史研究の成果を援用した教材開発に取り組み、その効果を授業実践によって検証した。その結果、開発した授業が、東アジア・スケールの歴史の見方・考え方を獲得させるとともに、アイヌ民族への一面的見方を変容させ、また歴史学習への関心を喚起する上でも一定程度、有効に作用したことを確認することができた。

キーワード：北方史、十三湊、津軽安藤氏、アイヌ民族、勝山館、討論学習

1. 問題の所在

本稿は、北方史研究の成果を活用した高等学校・日本史の授業開発を試みるとともに、その効果を授業実践により検証するものである。

北方史研究は東北・北海道地域の歴史を扱う研究領域として成立し、1990年代初頭頃から本格的な研究が進められてきた。その初期の段階では、日本列島の地域的多様性を探ろうとする関心の下で、東北・北海道地域の固有かつ独自の歴史展開を解明することに力点が置かれてきたが、近年では「日本列島の北方地域」という視点に留まらず、中国やロシアとの関わりも視野に収めながら「北東アジア史」の一環に位置づける研究視角も生まれている¹⁾。ここでは、中央政権を中心に据えた歴史の見方、および「国民国家」の領域性に拘束された一国史的な見方を乗り越えようとする問題関心が広く共有されてきており、着実な研究蓄積によって東北・北海道地域への歴史的イメージの刷新が図られてきている。

しかしながら、これら北方史研究の成果は、「国民

形成」という要請を強く背負い込む学校・歴史教育の現場には、十分に反映されているとは言い難い状況にある。とりわけ高等学校では、依然として「日本史/世界史」の科目区分が敷かれ、その「日本史」では従来の政権所在地を中心とした通史学習がカリキュラムの基調となっている。また、教科書叙述については、少数民族や「周辺地域」を視野におさめた叙述が徐々に増えてきているものの、未だ部分的・断片的な扱いに留まっていることが指摘されている²⁾。

こうした公的カリキュラムや教科書の問題点については、2006年の「世界史未履修問題」に端を発して活発化した高等学校の歴史新科目「歴史基礎」を巡る議論とも関連しながら、広く自覚され始めている。ただ、現段階においては、カリキュラム・教科書改訂の方向性は不透明な部分が多く、またその実施には多くの時間を要することが予想される。そのため、現段階では教材自主編成の取り組みを粘り強く続け、その成果を蓄積することが重要と思われる。この点、北方史研究に関心を寄せる人々によって教科書の問題点や教

* 青森県立五所川原高校

Gosyogawara High school

** 弘前大学教育学部社会科教育講座

Department of Social Studies Education, Faculty of Education, Hirosaki University

材開発の視点、教科書に代わる学習資料集などが提示されてきているものの、学校現場での授業開発の試みは遅れているように思われる³⁾。

以上を踏まえ、本研究では北方史研究の中でも研究蓄積の厚い13～16世紀に焦点をあて、その成果を実践的に組み替えながら授業開発を進めていく。その際、特に十三湊を拠点に活動した津軽安藤氏、及び北海道・上ノ国町に所在する中世後期の城館・勝山館を中心的な題材としながら、和人とアイヌ民族の関係史を教材化していく。

以下では、まず当該事象に関する教科書叙述及び歴史研究の状況を検討し、教材化の視点を析出していく。次に、考案した単元の全体構成を提示し、各時間の学習活動について生徒たちの学びの様子も含めて説明していく。その後、生徒たちの終末レポートの分析を通じて、本実践の成果と課題について考察する。なお、本実践は金子・小瑠が協同で授業開発に取り組み、その検証授業は金子の指導の下で実施した。

2. 教科書分析と教材開発の視点

(1) 日本史教科書の分析

ここではまず、本実践で扱う歴史事象が日本史教科書にどのように記述されているかを検討してみたい。対象とするのは、実践校の生達たちが使用している山川出版社の日本史B教科書『詳説日本史』(2006年3月検定済)である。同教科書は「第Ⅱ部 中世」の「第5章 武家社会の成長」の中に「2 幕府の衰退と庶民の台頭」の項目を設け、当該期の琉球王国を巡る動向に続けて、北東北・北海道地域の動向を次のように叙述している⁴⁾。

一方、すでに14世紀には畿内と津軽の十三湊とを結ぶ日本海交易がさかんにおこなわれ、サケ・コンブなど北海の産物が京都にもたらされた。やがて人々は本州から、蝦夷ヶ島と呼ばれた北海道の南部に進出し、各地の海岸に港や館(道南十二館*)を中心にした居住地をつくった。彼らは和人といわれ、津軽の豪族安藤(東)氏の支配下に属して勢力を拡大した。

古くから北海道に住み、漁労・狩猟や交易を生業としていたアイヌは、和人と交易をおこなった。和人の進出はしだいにアイヌを圧迫し、たえかねたアイヌは1457(長祿元)年、大首長コシヤミンを中心に蜂起し、一時は和人居住地のほとんどを攻め落としたが、まもなく上之国の領主蠣崎氏によってしずめられた。それ以後、蠣崎氏は道南地域の和人居住地の支配者に

成長し、江戸時代には松前氏と名乗る大名となった。

【脚注】

*その一つ、函館市にある志苔館からは、14世紀末から15世紀初めに埋められた合計約37万枚の中国銭が出土しており、この地域の経済的繁栄を物語っている。

以上の叙述に加え、「道南十二館と周辺要図」と題された地図が掲載され、そのキャプションには「道南十二館のうち茂別館と蠣崎氏の花沢館以外は、コシヤミンによって攻め落とされた」と記載されている。

このように、教科書にも北東北・北海道地域の歴史的状况が一定程度、記述されるようになっており、このこと自体は大きな進展と言えよう。ただ、「日本史」という科目の性格とも関係して、上記の叙述には見逃すことが出来ない問題も潜んでいる。ここでは、三点を指摘しておきたい。

一点目は、津軽安藤氏の位置付けに関わる問題である。教科書には安藤氏の本拠地の一つであった十三湊と畿内を結ぶ日本海交易ルートに触れ、北海の産物が京都に“もたらされた”ことが記されている。しかし、安藤氏が何を得たのか、北海の産物をどのように入手したのかは一切触れられておらず、いわば「中央」の視点のみで対象化されている。

この点に関わって、近年の歴史研究では、津軽安藤氏が幕府体制下で蝦夷管領として「東夷成敗権」を授けられた地方豪族であったと同時に、北海道・サハリンから大陸までを視野に入れて海上活動を展開する自立的な存在であった点が強調されている。さらに、朝敵や蝦夷との系譜的つながりを示す系図が他にはない特異性を有しているとして注目され、ここに自立と抵抗の意識を読み取る見解が示されている⁵⁾。

このような自立性への言及を欠き、狭い「日本史」の枠内で対象化している点に問題を見いだせる。十三湊は日本海沿岸航路の終点であったと同時に、そこを起点に「北」へ広がる世界が存在するのである。

関連して二点目は、アイヌ民族の対象化に関わる問題である。教科書では、和人との交易や対立を軸にアイヌ民族の動きが叙述されている。この和人との関係は、当該期のアイヌ民族を理解する上で不可欠の観点であることは確かだが、しかし“和人との関係”だけでアイヌ民族の歴史が描けるわけではない。

アイヌ史研究を先導してきた榎森進は、当該期のアイヌ社会が周辺の諸人間集団との接触を通じて、「民族」としての結束と成長を遂げた点を強調している⁶⁾。

具体的には、和人集団との交流・交易が活発化することで、次第に「交易の民」としての性格を強めるとともに、交易品となる鷲やアザラシ、オットセイなどの陸獣類・海獣類、また食料として重要な位置を占めた鮭などを求めサハリンへ進出し、そこでモンゴル・元朝と40年以上にも及ぶ長期の戦いを持続するまでに成長していた。その後、明朝の冊封体制が東アジアの地域秩序を規定するようになると、サハリンのアイヌ民族は冊封下に置かれたアムール川最下流域の北方諸民族との交易を活発化させ、これにより中国産の絹織物が北海道のアイヌ民族や和人社会にもたらされたことなどの動向を提示している。

教科書叙述では、このような北東アジア社会を舞台に躍動するアイヌ民族の姿が捨象され、和人との関係に限定して対象化されており、この点に自民族中心主義の発想を見出すこともできる⁷⁾。

三点目は、和人とアイヌ民族の関係が「対立」を軸に叙述されている点である。この時期、和人集団とアイヌ民族との間に矛盾が激化し、それがコシャマインの戦いとして表出した点を押さえることは重要である。ただ、近年の歴史研究では、この敵対的関係を強調する見方について、それが松前藩の歴史書「新羅之記録」を主要な史料の根拠として展開されてきたことから、“松前史観”や“新羅之記録史観”として批判的に捉え、敵対的関係に限定されない多様な関係を探る動向が生まれている。その重要な契機の一つとなったのが、勝山館での考古資料群の発掘であった⁸⁾。

コシャマインの戦いの平定により道南地域で支配力を強めた蠣崎氏が「夷狄の商船往還の法度」(1551年)を定めたことで自由交易から城下交易体制へ移行し、これを起点に近世期のアイヌ民族は幕府体制に組み込まれることになる。以後、アイヌ民族の生活・生産・交易は大きく制限されていくことになるが、それ以前の時期の和人集団とアイヌ民族の関係を巡っては、勝山館における「混住」を含め、再解釈の余地が生まれつつある。

以上、一部には歴史研究の成果が反映されているものの、「日本史」という科目の制約とも関係して、部分的・断片的な扱いに留まっていることを示してきた。ただ、見方を変えれば、教科書執筆者たちは制約を背負いながらも、最新の歴史研究の成果を反映させる努力を重ねていると推察される。重要なことは、教育実践を担う教師たちが、教科書叙述のわずかな変化を見逃さず、その意味と教育的価値を吟味しながら、具体的な教育実践に結び付けていくことであろう。

(2) 教材化の視点

以上で述べてきた教科書叙述の問題点を踏まえ、本実践では以下の三つの目標と教材開発の視点を設定することとした。

一点目は、津軽安藤氏の独自性・主体性を掘り下げて提示し、北東北地域を「辺境」と捉える空間認識を揺さぶることである。本実践の対象となる高校生たちの多くは青森県五所川原市周辺に居住しており、十三湊(現在の十三湖)は身近な存在である。その十三湊を治める津軽安藤氏が、単なる幕府体制下の地方豪族に収まらない行動・意識を示していたことに触れさせ、生徒の多くが内面化している「青森=辺境」という意識を揺さぶり、「中央」中心の見方・考え方への問い直しを図っていく。

二点目は、広く北東アジア世界で活動したアイヌ民族の主体的・躍動的な姿を提示することで、生徒たちのアイヌ認識を刷新することである。青森県に暮らす生徒たちも、アイヌ民族に関する知識は乏しく、偏見・差別意識を含んだ一面的なイメージで捉える傾向にある。近世・近代史の学習では、支配/抑圧構造と抵抗の視点から教材開発を進めることが重要と思われるが、それ以前の時期を扱う本実践では「民族」として成長するアイヌ民族の主体的な姿に触れさせていく。この点を押さえることが、近世・近代史の学習にとっても重要と考えるためである。その際、「日本史」の授業でありながらも、東アジア史的視野を意識的に確保し、その中にアイヌ民族を位置づけていく。

三点目は、生徒自らが歴史を主体的に解釈・構築する学習場面を設けることである。近年の歴史教育研究では、教科書や歴史学者たちが提示する歴史観を唯一の真理であるかのように教授する歴史授業のあり方を批判的に問い直し、学習者自身が諸資料の解釈を通じて歴史像を構築する、「構築主義的歴史学習」⁹⁾と呼ばれる授業づくりの潮流が生まれている。学習指導要領でも「歴史の解釈」という内容項目が新設され、諸資料から歴史事象を読み解き、その意味や意義を解釈させることが奨励されている。本実践の対象となる生徒たちは、歴史事象を主体的に読み解く経験が浅く、歴史学習を単なる外在的知識の記憶と受け止めている生徒も少なくない。そこで本実践では、勝山館における和人とアイヌの「混住」に着目させ、当該期の和人とアイヌ民族の関係を生徒たち自身で読み解く学習を構想することにした。

次項では、以上の3つの視点を内在化させて考案した学習プランの全体像と、学習の実際を示していく。

3. 単元構成と指導の実際

本実践は、青森県立五所川原高等学校において地理歴史科「日本史B」を履修する第2学年・44名（男子22名・女子22名）を対象として、2013年12月9日～19日にかけて実施した。

本校は、青森県西北地域の中核都市・五所川原市に所在する中規模校であり、生徒の9割以上が卒業後に大学進学する、いわゆる“進学校”である。1学年6クラス編成を採っており、在学生徒の出身地域は約半数が五所川原市内、残りは隣接するつがる市や周辺地域から通学している。

これらの生徒たちにとって「十三湖」は身近な存在ではあるものの、「十三湊」としての歴史的背景はほとんど認知していないと推察される。そこで、まずは生徒たちにも馴染み深い「十三湖」を入り口とし、そこから北方世界へ視野を広げつつ、和人とアイヌ民族と関係を問う学習を構想した。本単元は中世史学習を終えた後、その発展的学習として位置付けを与え、全

7時間を配当した。各時間の学習指導計画は、表1に示した通りである。以下、各時間の概要を順に示していく。

まず第1時間目の冒頭では、十三湊の航空写真を提示して場所を推測・確認させた上で、『廻船式目』の記述から博多や堺と同様に三津七湊の一つだったことを読み取らせた。さらに、『十三湊往来』の記述や出土した大量の陶磁器を示し、その繁栄の様子を把握させていった。その後、“十三湊を統治していた豪族は誰か”と問い、安藤氏の認知度を確認したが、初めて名前を聞くという生徒がほとんどであった。

続いて、資料を用いながら、安藤氏が執権北条氏に任命された“蝦夷管領”の代官であったこと、幕府が安藤氏の内紛を「元寇」と同レベルで重要視していたことに気づかせ、“安藤氏がなぜ、幕府から重要視されていたのか”を考えさせた。

この問いを考えるあたり、『後鑑』に記載されている安藤氏の献上品「馬20匹、鳥5千羽、鷲眼2万匹、海虎皮30枚、昆布5百把」に着目させ、鳥は鷲の羽、

表1 各時間の学習指導計画

時	学習内容	主な学習活動	資料	指導上の留意点
1 時間 目	中世港湾都市 十三湊	○航空写真を提示し、場所を推測する。 ○資料から十三湊が中世期に三津七湊に数えられるほど繁栄していたことに気づく ○『十三湊往来』の記載と出土した大量の陶磁器から繁栄の様子を具体的に理解する。	① ② ③④	・岩木山に着目させ十三湖に気付かせる。 ・三津七湊には博多や堺が含まれていることにも注目させる。 ・陶磁器が当時は国産化できない貴重なものであったことを伝える。
	津軽安藤氏に ついて	○安藤氏が鎌倉期には「蝦夷管領」の代官であったことを資料から読み取る。 ○幕府が「安藤氏の内乱」鎮静化のために五壇護摩法を行ったことを理解する。	⑤ ⑥	・「蝦夷管領」について補足説明を行う。 ・鎌倉期には「弘安の役」に際してのみ行われたことを伝え、それほど幕府に重要視されていたことに気づかせる。
	安藤氏と北方 世界	○安藤氏が幕府から重要視された理由を、将軍への献上品を手掛かりに考える。 ○安藤氏が北方世界の産物をどのように入手したかを予想し、アイヌとの交易に気づく。	⑦⑧	・「鳥」（鷲の羽）、「海虎皮」（ラッコ皮）、「昆布」に注目させ、その入手先を分布図から読み取らせる。 ・北方の産物が珍重されていたことを伝え、それが重要視された理由の一つであることに気づかせる。 ・十三湊遺跡から出土したアイヌのガラス玉を示し、深い関わりがあったことを伝える。
2 時間 目	北方世界の産物の価値	○資料から「鷲羽」、「ラッコの皮」、「昆布」の価値について知る。	⑨⑩ ⑪	・アザラシの毛皮の実物を触らせて、その希少性・品質の高さを実感させる。
	十三湊の位置について	○中央（幕府）・安藤氏・アイヌの関係をワークシートの図式にまとめる。 ○十三湊が交易の中継地となった理由を、地図から読み取る。	⑫	・安藤氏が日本社会と北方世界とを結ぶ役割を担っていたことを伝える。 ・二種類の地図を提示し、日本海やオホーツク海が「湖」のように見え、そこで活発な交易が行われていたことを伝える。
	「日の本將軍」 安藤氏	○資料から、安藤氏が「日の本將軍」と称されていたことを知る。 ○なぜ安藤氏が蝦夷を祖先にした系譜を作成したか、その理由を考える。	⑬	・「日の本」が北海道東部を意味することを伝える。 ・こうした「朝敵」を先祖に位置づける家系図は、他にみられないことを伝える。
	まとめ	○1・2時間目の感想、およびアイヌ民族のイメージをミニレポートにまとめる。		

3時間目	情報・イメージの共有	○レポートに記載されたアイヌに関する代表的な知識・イメージを板書し、全体で共有する。		・そうしたイメージや見方が妥当かと問い、同時代のアイヌ民族の動向を学ぶことを伝える。
	アイヌと元王朝	○資料からアイヌと元王朝が戦っていたことを知り、その時期・回数(年数)・アイヌの進出地域などを読み取る。	⑭⑮	・戦いの時期が元寇と重なっていたことや、元の勢力を押し返してアムール川最下流域まで進出したことに注目させる。 ・交易品を求めて北進したこと、交易を通じて民族的成長を遂げていたことに気づかせる。
	アイヌと明王朝	○資料から、アイヌと明が朝貢関係を結んでいたこと、明の冊封体制下に置かれた北方諸民族と交易をしていたことを読み取る。	⑯	・明が外交方法として朝貢を用いたことを説明し、室町幕府も冊封されたことを伝える。 ・アイヌが日本以外の東アジア諸民族とも交易していたことに気づかせる。
	アイヌと清王朝	○江戸時代に江戸や京都で人気のあった蝦夷錦のルーツが清王朝にあり、アイヌを媒介にして流入していたことを知る。	⑰	・蝦夷錦を纏った歌舞伎役者の絵画を提示して関心を高める。 ・山丹交易について紹介する。
	まとめ	○学んだことをミニレポートにまとめる。		・前時に書いたアイヌ像を振り返えるよう促す。
4時間目	アイヌと和人の墓	○勝山館で発掘されたアイヌが埋葬された墓が、歴史関係者に驚きを与えた理由を考える。	⑱	・教科書を参照させてコシヤマインの戦いと道南十二館に注目を促し、手がかりにさせる。
	勝山館について	○映像資料を視聴し、勝山館の概要を理解する。 ○視聴後にグループを組み、情報を共有する。	⑲ ⑳	・時期、位置、館主、出土品、その他の項目をワークシートに設け、メモするように指示する。 ・アイヌ関連の出土物を中心に補足説明をする。
	各自の仮説形成	○「埋葬されたアイヌは何者か」という問いについて、まずは個人で仮説を考える。		・次時以降の討論学習のスケジュールを伝え、各自で仮説を考えてくることを宿題に課す。
5時間目	グループの仮説形成	○4人1組のグループに分かれ、グループとしての仮説をつくる。		・まず各自で考案した仮説をグループ内で共有させ、そこから一つの仮説に絞らせる。 ・ワークシートには根拠となる事実や資料も記述させる。また自説に対する批判点や弱点も想定させる。 ・教師は質問を随時、受け付け、教室前方には関連文献を用意し、自由にアクセスできるようにする。
	仮説の共有	○各グループの仮説を全体で共有する。		・全グループの仮説名を黒板に書き出す。
6時間目	仮説発表と質疑	○討論の進め方を確認する。 ○論点1：主従関係はあったか、なかったか？ ○論点2：対立関係か、友好関係か？		・各グループの主張内容をまとめた一覧表を配布し、3つの論点について討論を行うことを伝える。 ・代表班に発表を行かせた後、作戦タイムを設け、自由討論に移る。
7時間目	前時の続き	○論点3：埋葬されたアイヌは何者か？		・終了後、簡潔な講評を行う。
	その後の北海道	○資料から「夷狄の商舶往還法度」の内容を読み取り、その歴史的意味を理解する。	㉑	・同法度がアイヌの自由交易を制約し、「初期和内地」を創出したことを伝え、それ以前と以後の違いを簡潔に説明する。
	松前藩とアイヌ	○松前藩の商場知行制によってアイヌが不利な交易を強いられたことを理解する。 ○全7時間の感想を終末レポートにまとめる。	㉒	・具体的な交易品と比率を提示する。 ・シャクシャインの戦いにも簡単に触れる。 ・終わらなかった場合は宿題とする。

【資料一覧】

- ①『青森県史 資料編中世2』青森県史編さん中世部会、2005年、1頁、②榎森進「激動の北の中世」『新版 北海道の歴史(上) 古代・中世・近世編』北海道新聞社、2011年、174頁、③『青森県史 資料編中世3』青森県史編さん中世部会、2012年、486頁、④十三湊遺跡出土品の写真(五所川原市教育委員会・榎原滋高氏提供)、⑤前掲『青森県史 資料編中世3』、89頁、⑥榎森進『アイヌ民族の歴史』草風館、2008年、66-67頁、⑦『新訂増補版 国史大系』第35巻吉川弘文館、2002年、697頁、⑧「オオワシ分布図」(斜里町立知床博物館『オジロワシとオオワシ 郷土学習シリーズ第12集』1995年、20頁)、「ラッコ分布図」(『日本の哺乳類 改訂2版』東海大学出版会、2008年、89頁)、⑨「アンジェリス第一蝦夷報告書」H. チースリク編『北方探検記』吉川弘文館、1962年、56頁、⑩『最新日本史図表 六訂版』第一学習社、2013年、115頁、⑪瀬川拓郎『アイヌの歴史』講談社、2007年、135-140頁、⑫『北海道を中心にした日本全図』(北海道を中心とした日本全図制作委員会)、『逆さ日本地図：東アジア交流地図』(佐渡市)、⑬前掲『青森県史 資料編中世2』、304頁、⑭『元史』巻5、世祖本紀2、至元元年11月辛巳、田端宏・桑原真人『アイヌ民族の歴史と文化—教育指導の手引』山川出版社、2007年、30頁、⑮前掲『新版 北海道の歴史(上) 古代・中世・近世編』、169-171頁、⑯『勅修奴干永寧寺碑記』(前掲『アイヌ民族の歴史と文化』、32頁)、⑰「歌舞伎役者松本幸四郎の絵」早稲田大学演劇博物館 HP (<http://www.enpaku.waseda.ac.jp/db/enpakunishik/results-1.php>)、⑱隣り合うアイヌと和人の墓の写真(上ノ国町教育委員会・塚田直哉氏提供)、⑲『DVD 勝山館とその時代』上ノ国町教育委員会、⑳勝山館出土品写真(上ノ国町教育委員会・塚田直哉氏提供)、㉑前掲『新版 北海道の歴史(上) 古代・中世・近世編』、223-225頁、㉒知里むつみ『アイヌ民族の歴史といま』汐文社、2009年、23頁

鷺眼が中国銭のことであることを確認したうえで、「海虎皮」が何かを考えさせた。生徒からは様々な意見が出たが、ヒントを与え、それがラッコの皮であることに気づかせた。その後、ラッコ皮・鷺の羽の産地を問い、その分布図を提示することで、これらが北方世界でしか捕獲できないことを理解させた。その上で、安藤氏がこの貴重な交易品をもたらしたために、幕府から特別視されていたことに気づかせた。最後に“安藤氏はどのように北方世界の産物を手に入れたのか”と問い、アイヌとの交易で入手したことに気づかせ、十三湊遺跡群からもアイヌが使用していたガラス玉が出土していることを紹介して授業を終えた。

第2時間目は、北方の交易品の価値を確認することから開始した。ラッコの皮については、宣教師アンジェリスの報告書の記載を提示するとともに、実物のアザラシの毛皮を触らせ、その良質の手触りから品質の高さと希少性を実感させた。昆布については、中国や琉球にも輸出されるほど人気の品であったことを説明した。鷺の羽については、『新猿楽記』の“金銀と同等の扱いをされていた”という記述からその価値を理解させた。

続いて、中央（幕府）－津軽安藤氏－アイヌの三者の関係をワークシートに整理させた上で、“北のはずれ”である十三湊が中世期に北方世界との中継地と

して繁栄した理由を、二種類の地図を用いて掴ませていった。一つは、図1に示した『北海道を中心とした日本全図』（北海道を中心とした日本全図制作委員会）、他方は『逆さ日本地図：東アジア交流地図』（佐渡市）である。最初はこの地図がわからない生徒もいたが、次第に日本列島が描かれていることに気付いていった。そして、この地図を通してみると、日本海や東シナ海、オホーツク海が「湖」のように見えること、それぞれの海域で活発な交流が展開されていたこと、海＝断絶ではなく繋がるものという見方を示した上で、十三湊が北方交易の中心地に位置することを把握させていった。生徒たちは、慣れ親しんできた空間認識・地理感覚を揺さぶられ、新鮮に受け止めている様子であった。

次に、安藤氏が室町期に幕府から“日の本將軍”と称されたことを資料から読み取らせ、“日の本”が北海道東部を指し、この時期の蝦夷が“渡党”“唐子”“日の本”の三集団に分類されていたことを説明した。その上で、当時の武士が自らの系譜を將軍家や天皇家に求めたのに対し、安藤氏が自らを前九年合戦で「朝敵」であった安倍貞任の末裔に位置づけ、「安倍」を本姓としていたことに着目させ、その理由を考えさせた。生徒からは、「先祖を蝦夷とすることでアイヌに親近感を抱かせ、交易を有利にした」、「蝦夷の子孫と

図1 北海道を中心とした日本全図



出所：北海道を中心とした日本全図制作委員会

図2 隣接する和人墓（中央・左上）とアイヌ墓（左右）



中央と左上が和人の墓とされる仏教様式の屈葬土葬墓、左右が近世アイヌ墓との共通性からアイヌの墓とされる伸展土葬墓。

出所：上ノ国町教育委員会・塚田直哉氏提供

称することで幕府に自分の力を示したかった」等の意見が出された。その後、次時で安藤氏が交易相手としたアイヌについて学習することを予告し、ここまでの学習で考えたことや感じたこと、またアイヌ民族へのイメージ・知識をミニレポートにまとめることを宿題とした。

第3時間目は、冒頭で宿題としたアイヌ民族へのイメージについて、代表的なものを紹介して教室全体で共有していった。生徒からは“野蛮な民族”、“遅れた民族”、“北海道の民族”、“差別され弱い民族”といったイメージが出され、“はたしてそうなのか”、と問い授業を開始していった。

まず、元王朝とアイヌとの関係から話題を開始し、『元史』と『新版北海道の歴史 上巻』の記述から、アイヌが元王朝と約40年間数回にわたり交戦し、その時期が元寇と重なること、元の勢力を押し返し、アムール川最下流域まで進出したことを読みとらせていった。同時に、アイヌが日本社会との交易品の獲得・生産のために北上し、それを巡り北方諸民族との紛争が発生したため、元王朝が介入したという背景も読み取らせた。

続いて、明王朝期に話題を移し、『重慶永寧寺碑記』からアイヌが朝貢関係を結んでいたことに気づかせた上で、日本社会とだけ関わりを持っていただけではなく、広く東アジアを舞台に躍動する民族であったことを理解させた。その後の清王朝期の山丹交易にも触れ、アイヌを介して大陸から日本社会にもたらされた「蝦夷錦」を中心に話題を展開した。蝦夷錦を纏った江戸期の歌舞伎役者松本幸四郎の絵画資料を提示し、蝦夷錦が江戸や京都で珍重されたこと、また青森県でも多く発見されていることを紹介した。最後に、本時の学習を踏まえ、自己のアイヌ民族に対するイメージについて振り返りをおこなわせた。

第4時間目は、冒頭で勝山館・夷王山墳墓群から発掘された和人とアイヌが隣り合う墓の写真(図2)を提示し、これが歴史学者たちに衝撃を与えたことを伝え、その理由を考えさせるところから開始した。生徒たちは教科書のコシャマインの戦いに関する叙述を読むことで、和人とアイヌが敵対的関係にあったとする通説の見方と矛盾することに気付いていった。

続いて、“勝山館の墳墓群から発掘されたアイヌは何者だったのか”という問いを提示し、この問いを巡って討論学習を行う旨を伝え、その基礎的知識を獲得するために上ノ国町教育委員会が製作した映像資料『勝山館とその時代』(15分)を視聴することにした。

その際、ワークシートに時期、位置、出土品、その他の項目を設け、適宜、メモをとるように促した。視聴後には、イクパスイや骨角器などアイヌの「混住」を示す出土品に関する写真資料を提示した。その後、四人一組のグループを作り、獲得した情報を共有させていった。その上で、上記の問いに対する仮説を、まずは個人で考えてくることを次時までの宿題に課し、授業を終えた。

第5時間目は、補足資料として「勝山館関係年表」と上ノ国町教育委員会編『たずねてみよう エゾが島の中世』を配布した上で、グループでの仮説づくりに取り組ませた。まずは、各自が考えてきた仮説をグループ内で共有させたいえで、グループとしての仮説とその根拠を練り、その主張内容をワークシートにまとめる作業に取り組ませた。その際、自説の弱点や批判も想定し、それへの反論も考えるよう指示した。この間、教師は机間支援を行い、生徒からの質問を受けたほか、勝山館やアイヌに関する文献を準備し、生徒たちが自由に閲覧できる環境を整備した。

生徒たちは活発に意見交換を行っているように見受けられ、教師に積極的に質問をする生徒も多く、「勝山館以外でもアイヌと和人の墓は発見されているのか」、「アイヌと和人は言葉が通じていたのか」、「アイヌ同士が戦うことはあったのか」などの質問を寄せてきた。授業の終末部では、各グループの仮説を黒板に記させ、全グループの仮説を確認させた。各グループが立てた仮説は、次のようなものであった。

1班：仲間、2班：商人、3班：交易の道具、4班：仲の良い交易相手、5班：骨角器の職人、6班：友人、7班：仲間、8班：召使い、9班：商人、10班：和人と手を組んだ人、11班：実は和人

このように“何者であったか”という問いに対し、和人との関係性を抽象的に表現する仮説(仲間や友人など)が示される一方、その社会的属性を具体的に明示する仮説(職人や商人)も示され、相互に距離が感じられた。その距離を埋めて討論を円滑化するために、各グループの主張内容を精読・整理した上で、次の三つの論点を設定することにした。

第一の論点は主従関係の有無、第二は対立関係にあったのか、それとも友好関係であったのか、そして第三はアイヌの性格を巡る解釈である。その上で、各論点に対して明確な見解を示している代表班を選定し、主張と批判・反駁を繰り返す学習活動を組織する

ことにした。

第6時間目は、上述した手続きで討論学習に取り組んでいった。各グループの主張内容と各論点に対する立場を整理した一覧表を配布し、討論の進め方を示した上で、論点1：主従関係の有無から討論を開始した。この論点に対しては、8班（召使い）を“主従関係有り”、1班（仲間）を“主従関係なし”の代表班に選定し、その主張を発表させた。

8班は、コシャマインの戦いで和人がアイヌを制圧した事実を根拠に、主従関係が存在したと考えるのが自然であるとし、隣り合わせる墓については、奴隷のような明確な上下関係ではなく“緩い”関係だったため、和人と同じ場所に埋葬されたのではないかと述べた。これに対して1班は、アイヌの儀式道具であるイクパスイの発見を根拠に、アイヌが和人に従属していたのならば、儀式を行うことは認められなかったはずだと述べた。また、墓から発見された剣に注目し、立場が弱かったならばそのような立派な副葬品は埋葬されるはずがない、と主張した。

この1班の“文化の承認”という視点は、アイヌが使用した骨角器の発掘に注目した5班などの支持を受けた。その後の討論でも、8班に対して、2班がアイヌと和人の埋葬方法の違いはお互いの文化を尊重していた証拠で主従関係はないと批判した。さらに9班も主従関係の有無があれば、埋葬場所も区別されていたのではないかと主張した。

続いて、対立関係／友好関係を巡る論点2では、3班（交易の道具）を対立関係の代表班に選定し、発表を行わせた。3班はコシャマインの戦いでアイヌと和人が戦った事実から対立関係が基調となっていたことを述べ、勝山館における「混住」は和人がアイヌを監視するためのものではないかと主張した。

これに対して、6班（友人）は相互の文化の尊重を、4班（仲の良い交易相手）は和人にとってアイヌは大切な交易相手であったことを根拠に友好関係を主張した。次に「中間的立場」として、2班がアイヌと和人は時には争い、時には交易のために友好関係を結んだと主張した。また同じ「中間的立場」に立つ7班と10班は、勝山館が防御機能を備えていることを指摘した上で、アイヌにも様々な集団が存在し、勝山館内のアイヌは和人と友好関係を結び、それ以外は対立関係にあったと述べた。その後の討論では、2班が防御機能を備えた勝山館内に対立するアイヌを入れるはずがないと述べた。これに対し、3班は勝山館をつくったのはアイヌを倒した蠣崎氏なのだから、やはり対立

していたのではないかと反論した。ここで授業終了のチャイムが鳴り、さらに意見が続きそうな雰囲気もあったが授業を終え、第三の論点については次時で扱うことにした。

第7時間目は、論点3：アイヌの性格を巡る議論から開始した。まず9班が、当該期のアイヌと和人との活発な交易や様々な出土品を根拠に埋葬されたアイヌは“商人”だと主張した。続く5班は、多数発見された骨角器に着目し、それを作ることができるのはアイヌだけであると考え、“職人説”を唱えた。最後に11班は、埋葬されたのはアイヌではなく、“アイヌ文化を真似た和人”であると主張した。この説は、かなり大胆なものではあるが、勝山館以外からは“混住”を示す遺物があまり発見されていないことに注目したものであった。その後、5班の“職人説”に対して、10班が骨角器を作っていたのは必ずしもアイヌではなく、和人も作ったのではないかと反論した。この時点で、時間の都合上、討論を打ち切ることにした。

授業の後半では、その後の北海道史を概観した。「夷狄の商舶往還の法度」制定後は、蠣崎氏によるアイヌ交易の独占体制が創出され、「初期和内地」が成立したことを説明した。その後、江戸期には松前藩が商場知行制を確立し、次第にアイヌが不利な交易を強いられ、その結果、シャクシャインの戦いに至ったことを把握させた。この近世期以降の歴史的状況を踏まえると、本実践で扱った時期は「過渡期」としての性格を持つことを伝え、授業を終えた。そして、終末レポートとして全7時間の学習の感想をまとめるよう指示した。

4. 生徒たちは何を学んだのか

それでは、以上で示してきた一連の学習活動は、生徒たちの歴史意識・歴史認識にどのように作用し、いかなる意味を残していったのだろうか。ここでは、生徒たちが作成した終末レポートの記述内容を検討し、本実践の成果について考えてみたい。

まず本実践の目標の一つは、「中央」を中心とした歴史の見方、考え方を問い直すことであった。

この点、ほぼ全ての生徒が地域史を学んだことを肯定的に記述しており、これまで地域史を学んだ経験がなかったことを併記する生徒も多く見られた。以下、そのいくつかを示しておく。

・今回、北日本の歴史を学んでみて、北日本もとても栄えていたんだなあというのが一番大きかったで

す。今まで日本史を勉強してきたほとんど北日本のことが出てこなかったけれど、詳しく勉強すると、今まで持っていたイメージと違う部分があって、とても興味を持ちました。

- ・今回の授業では、教科書でほとんど扱われていない北日本の歴史を深く学ぶことができた。これまで北日本は関東などに比べ大きな事件や幕府に関連する歴史があまりないという印象だったが、そうではないことが分かり、北日本への見方が変わった。
- ・今まで日本史の勉強をしていて青森県が出てくるのはほとんどなく、青森は田舎なんだと思っていたのに、十三湊が昔は全国的に有名でとても繁栄していたと知り、地元の青森にそのような場所があることがとても嬉しかったです。
- ・いつも首都に近い所や権力者やその周囲での歴史ばかりで身近な歴史には気づけなかったけれど、こうして調べてみると自分が想像していた以上に多くの、そして深い歴史があり、とても驚きました。まさか、自分たちの近くにこんなにも深い歴史があるとは思っていなかったので、調べたり仮説を立てたりするのが楽しく思えました。

こうした記述から考えると、本実践は生徒たちが潜在的に備えていた地域史への関心のある程度、喚起することができたと思われる。その際、生徒たちが「中央」を中心とした日本史授業を重ねる過程である種の疎外感情や劣等意識を蓄積し、それと結びつく形で学習意欲が喚起された様子が伺える。また、“この授業を受けて、どうして教科書、資料集に北日本の歴史が1～2ページなのだろう、逆に教科書にたくさん載っている京都、鎌倉付近の歴史はどうしてそんなに重要なのかという疑問を抱きました”という記述にみられるように、「中央」に傾斜した歴史教科書への疑問を提示する生徒も存在した。

他方、地域史認識の質的側面については、約半数程度の生徒たちが十三湊の繁栄を新鮮に受け止めたことを記述していた。その際、「こんなに田舎なのに栄えていたことは驚きだった」、「今は栄えているわけではないので昔もそうなのかなあと考えていました」、「今の青森からはとても想像できない」といった記述にみられるように、現在と対比させる形で「驚き」を表現する記述パターンが多く見られた。生徒たちが後進地意識を深く内面化し、「遅れ」や「停滞」といった側面から自らの居住地域を捉えている実態を改めて確認できるが、こうした地域認識を持つ生徒たちにとっ

て、自らの居住地域を北東アジアの中に位置付け直す作業は新鮮な経験となったようである。また、以下の記述からは、北海道を中心とした地図を活用したことや、交易品を具体的に提示したことが、生徒たちの円滑な理解を支えていたことが読み取れる。

- ・十三湊が昔はとても栄えていたところだったと言うことが最初は驚きでした。でも授業で日本や中国周辺の地図を違う見方をしてみると、十三湊は真ん中にあることが分かり、納得することが出来ました。
- ・青森は本州の北端ですが、視点を変えて北方世界を含めて見てみると、たしかに本州と北方世界の中間地点には絶好の場所のように見えました。
- ・日本人とアイヌ人はとても仲が悪く思っていたけれど、実際はラッコ皮や鷲羽など北方世界でしかとれないものを交易していたこと、アイヌがとても行動的だったことが、とても印象に残りました。
- ・幕府への献上品としてラッコ皮や鷲羽などを贈り、ラッコ皮を馬に座るための敷物にしてオシャレをしたり、鷲羽を弓矢に用いたり、当時の人も賢かったんだなあと思った。自分も本物のアザラシの毛皮を触ってみたいけれど、手触りがとてもよかった。
- ・昔の交易品にも結構驚きました。ラッコやアザラシの毛皮なんて普段は見たことも聞いたこともないので、昔の人の知恵や工夫、経験の豊富さなどがそこにあるような気がして、すごいと思いました。

次に本実践では、アイヌ認識の変容を促すことを二つ目の目標として設定した。生徒たちがどのようなアイヌ認識を備えているかを把握するために、第2時間目の最後にアイヌ民族に対するイメージと知識を記述させたところ、「野蛮」、「野生的」、「遅れている」、「縄文時代に近い生活」、「北海道の奥地にいる」、「差別の対象」、「独特の文化」、「外国人に近い」、「反乱をよく起こす」といった言葉が挙げられた。同時に、こうしたイメージが小学校時代に修学旅行で訪問した「アイヌ民族博物館・しらおいポロトコタン」（北海道・白老町）での経験に強く影響されていることを把握することができた。

青森県では小学校の修学旅行先として北海道・道南地域を選択し、同施設をコースに組み込むことが多いという。筆者らも本実践の教材研究の一環として同施設を訪問したが、その博物館内の展示の特色は「熊送り」などの儀礼や狩猟の様子、食文化、家屋などの生活文化をリアルに再現する点にあり、園内では熊の飼

育や茅葺の家（チセ）の集落の再現、古式舞踊の実演なども行われ、レジャー施設としての性格も備えているように感じられた¹⁰⁾。生徒たちはアイヌ民族が歩んできた歴史や日本社会との関わり、厳しい差別の現実などへの知識・理解を欠いたまま「異民族性」のみを強く印象に残し、ともすれば偏見・差別意識も含んだ一面的なイメージで捉えているように思われた。

本実践の3時間目以降で提供したアイヌ民族に関する知識は、そうした生徒たちのイメージに修正を迫ったようであり、終末レポートでは小学校時代の修学旅行に触れながら、自らの認識の変容に言及する生徒が多く存在した。

- ・今回の授業でアイヌのイメージが格段に変わりました。最初は小学校の時、修学旅行で見たようなピリカピリカを踊っている謎の宗教団体だと思っていましたが、いろいろな戦いに出て、とても強かったと聞いてびっくりしました。しかも、元と約40年間戦っていたりしていたので、意外でした。
- ・小学校の時に北海道に行ったときに、アイヌ村みたいな記念館に行ったのですが、その時とは印象が変わりました。もっと縄文人に近いような生活を行っていると思っていましたが、実際は色々な国々と交易をしたりしてすごい民族でした。

“イメージが変わった”、“驚いた”といった記述は数多く確認できたが、その内容は以下の三点に分類できる。一点目は、元との戦いに触れて民族的力量の高さに言及する記述であり、ほとんどの生徒が記述していた。既に鎌倉時代の学習で元との交戦を扱っていたこともあり、強く印象に残っていたようである。二点目は、交易とサハリンへの進出を取り上げる記述であり、そこから“活動的”、“行動的”、“勢力が広い”、“頭腦的”、“先進的文化的摂取”といった評価を記述していた。閉鎖性や後進性といったイメージでアイヌ民族を捉えていた生徒たちにとって、北東アジアで躍動するアイヌ民族の姿はインパクトを持ったようである。三点目は、討論学習のテーマに設定した和人ととの関係に関わる記述であり、両者が交易や共存する姿を“意外”と記す生徒が多く存在した。おそらく、近世・近代期以降の敵対的関係や支配／従属関係、あるいは現代の差別的状況をいわば“常識的な見方”として定着させてきたため、交易を介して利害関係を共有する姿や勝山館における「混住」が新鮮に受け止められたものと思われる。

以上、生徒たちのアイヌ認識の変容を探ったが、ほとんどの生徒が歴史的文脈に即してアイヌ民族の姿を探る姿勢を示していた。偏見・差別意識を克服して肯定的な態度を形成するためには、こうした具体的な歴史知識を獲得・定着させていくことが一つの方策になると考える。

最後に、本実践では、生徒たち自身が歴史事象を主体的に読み解き、その解釈を集団で深め合う学習活動を取り入れた。この解釈・討論学習を生徒たちはどのように受け止めたのだろうか。この点、ほぼ全てのレポートに、解釈・討論学習に対する肯定的な記述を確認することができたが、そこには次の二つの要素が含まれていた。

一つは集団での学び合いに対する肯定的評価であり、“同じ資料を用いているのに解釈が異なっていて面白かった”、“他のグループでは逆の意見もあり、色々な考え方があって面白かった”、“他の班の意見を聞きながら考えが深まったりして楽しかった”、“他の人の考えを踏まえた上で自分の意見を発展させる、というのが面白かった”といった記述が数多く見られた。本実践では、“勝山館の墓から発掘されたアイヌは何者だったか”という論点を設定した上で、四人一組で仮説を立て、三つの論点に絞り込んで討論を行なった。生徒たちが立てた仮説は、その抽象度／具体性に幅がみられたが、論点を絞り込み“共通の土俵”を設定したことで思考の焦点化が図られ、意見交流も活発化したものと推察される。そのことが上述したような肯定的評価を生み出す背景になったのではないかと考える。

もう一つの肯定的評価は、自ら歴史を読み解く営みに向けられ、“自分で資料を調べ、仮説を立て、発表するのが楽しかった”、“様々な根拠を基に何が正しいかを見極めるのが楽しかった”、“和人とアイヌの関係だけで、こんなにも様々なことが分かり、考えることができるので、日本全土というスケールで考えると数え切れないほどの発見や考えが生まれると感動したし、歴史には様々な可能性や楽しさがあると思った”といった記述が確認できたほか、討論テーマを継続的に考え、自説を展開する生徒も多くみられた。

教科書等に記載されている知識・解釈を覚えることに慣れてきた生徒たちにとって、自ら歴史を構築する作業は難しさを伴いながらも、新鮮な経験として印象に残ったようである。歴史事象を解釈する学習を巡っては、歴史学者が示す複数の仮説を提示して、各々の説明力を批判的に吟味する学習理論¹¹⁾も提案されてい

るが、今回は生徒たちにとって初めての経験であることを考慮して、多様な解釈が可能な論題を設定し、自由な解釈の機会を与えることとした。論理性や実証性という点ではやや弱さを残したが、歴史を主体的に探究する楽しさや奥深さを感じ取ってくれたものと思われる。

5. まとめにかえて

以上、生徒たちが作成した終末レポートの記述内容を検討し、本実践の成果について述べてきたが、本実践で設定した三つの目標は概ね達成できたのではないかと考える。ただ、生徒のレポート記述には、本実践を契機に生まれた発展的な問いや新たな学習要求も記されていた。

一つには、地域史に関わって“毎日バスで十三を通ってくるけれど今は全く栄えていた面影がみられません。十三湊についての授業を受けた日から、何故こんなに衰退してしまったのだろうと考えるようになりました”という記述にみられるように、“なぜ、衰退したのか”という生活現実に根ざした切実な疑問を多くの生徒が記していた。また、本実践では取り上げることが出来なかったアイヌ民族の生活文化を改めて学びたいと記す生徒や、当該期以降のアイヌ民族を巡る歴史的状況を知りたいと記す生徒も多かった。他方、解釈・討論学習についても、“他の時代についても自分で調べ仮説を立ててみたい”、“自分が興味を持った時代や事件などは自主的に調べたい”といった記述がみられた。

こうした生徒たちの学習要求に応じていくことは容易ではないが、カリキュラム開発に取り組み、各時代で獲得すべき知識内容や思考力を明確化・体系化することが重要であると考えられる。その際、特に「東北」を巡る今日の状況を踏まえるならば、近現代史学習の素材や視点を定めることが急務と感じている。

また、本実践を通じて、生徒たちが単線的な進歩史観を強く内面化し、それに基づき自らの居住地域や他民族を眼差している現実を痛感した。この進歩史観の克服という課題に対しては、自己の“眼差し”自体を眼差し返すような学習場面が必要ではないかと考えている。この点に関わって、特定の歴史観が生産・受容される過程を分析させることにより、自己の認識枠組みの“歪み”に気づかせていく歴史授業論が既に提案されている¹²⁾。こうした視点から北海道・東北史の学習を考案することも重要と思われる。今後の課題としたい。

註・引用文献

- 1) 榎森進「地方史研究の現在（北方史）」、地方史研究協議会『地方史研究』第61巻2号、29－32頁、2011年。
- 2) 北方史研究の視点から既存の歴史教科書の問題点を検討したものに、天野哲也・白杵勲・菊池俊彦編『北方世界の交流と変容—中世東北アジアと日本列島』（山川出版社、2006年）、大隈和雄・村井章介編『中世後期における東アジアの国際関係』（山川出版社、1997年）がある。
- 3) 例えば、小学生及び中学生向けの副読本として公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構『アイヌ民族：歴史と現在—未来をともに生きるために—』があるほか、歴史資料を豊富に収録した手引書として、田端宏・桑原真人監修『アイヌ民族の歴史と文化—教育指導の手引—』（山川出版社、2000年）がある。また、北海道歴史教育者協議会では北海道の地域素材を題材にした歴史授業づくりが進められており、その成果として『北の大地から未来への発信1』（2009年）などが刊行されている。
- 4) 山川出版社『詳説日本史』（2006年検定済）、131－132頁。
- 5) 村井章介『世界史のなかの戦国日本』ちくま学芸文庫、66－70頁、2012年。
- 6) 榎森進「激動の北の中世」『新版 北海道の歴史（上）古代・中世・近世編』北海道新聞社、2011年
- 7) 最新の山川出版社『詳説日本史』（2012年検定済）では、モンゴル・元朝との戦いが以下のように記述されるようになった。
「一方、北の蝦夷ヶ島では、古代には『続縄文文化』を経て、擦文文化やオホーツク文化が広がっていたが、それを経て13世紀にはアイヌの文化が生まれるようになり、津軽の十三湊を根拠地として得宗の支配下にあった安藤（安東）氏との交易をおこなっていた。そのアイヌの人々のうちサハリンに住んでいた人々は、モンゴルと交戦しており、モンゴルの影響は広く日本列島におよんでいった。」（109－110頁）。
未だ断片的・部分的な印象はぬぐえないが、「周辺地域」や東アジア的視野を確保する視点が徐々に採用されている。
- 8) 前掲教科書『詳説日本史』（山川出版社、2012年検定済）には、勝山館についても以下のような記述がみられるようになった。
「蠣崎氏の祖武田信広がコシャマインの戦いののちに築城した勝山館跡（北海道檜山郡上ノ国町）からは、武家屋敷跡や職人の工房跡、和人・アイヌの墓地などの遺構のほか、日本・中国産の陶磁器やアイヌの骨角器など、多数の遺物が出土している。」（131頁の脚注）
- 9) 構築主義的歴史学習の動向や類型については、戸田善治「社会科における歴史認識の育成」（日本社会科教育学会編『新時代を拓く社会科の挑戦』第一学習社、2006年）に詳しい。
- 10) 同施設の概要は下記のHPで確認することが出来る。
（アイヌ民族博物館 HP：<http://www.ainu-museum.or.jp/>）
- 11) 児玉康弘『中等歴史教育内容開発研究—開かれた解釈

学習一』風間書房、2005年。

- 12) 戸田は、こうした歴史授業を「脱構築主義」授業論と名付け、「ユダヤ人種」概念の構築過程を教材化した高橋健司の研究や、アフリカ系アメリカ人のイメージ形成過程を授業化した田尻信壹の研究を、その具体例に挙げている。(前掲書、日本社会科教育学会、2006年)

【謝辞】

本稿の執筆にあたっては、塚田直哉氏（上ノ国町教育委員会事務局文化財グループ）、榊原滋高氏（五所川原市教育委員会社会教育課十三湊発掘調査室）、鈴木琢也氏（北海道開拓記念館）、中村和之氏（函館工業高等専門学校）、斉藤利男氏（本学教育学部）、篠塚明彦氏（本学教育学部）、小岩直人氏（本学教育学部）の各氏に貴重な資料や助言を提供して頂きました。記して感謝申し上げます。

(2014. 1.14 受理)